

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	関谷孝英君の死を悼む <故 関谷孝英君を偲んで>
Author(s)	原野, 昇
Citation	広大言語 , 10 : 40 - 41
Issue Date	1970-12-15
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046352
Right	
Relation	



をもっていた。酒が入ったせいもあって僕はかなりきつい言葉で、反駁したりした。

三時間余りの時は束の間に過ぎた。国鉄の五日市駅まで、暗い、遠い道を歩いて帰った。「先生に対して、あんなにきついことまで言われなくても、よかったんじゃないかなあ」—あのちょっといかつい顔の、ひとの好さそうな目を細めながら、彼はほつんとつぶやくように言った。

五日市から電車に乗って、広島駅のプラットフォームで別れた。それが最後になった。思いがけない時に突然電話や電報で呼びだして、気の合った話を肴に、うまい酒を飲ませてくれた彼は、もういない。その死もまた突然であった。

(1970、10、23)

関谷孝英君の死を悼む

原野 昇

昭和45年9月17日、フランスから3年ぶりに広島に帰った僕は、10日余を身の諸事に忙殺されながらも、友人、知人へ帰国の報告をせねばと幾枚かの挨拶状の印刷を依頼した。9月下旬それが出来上ってきたので、一人ずつ先顔を思い出しながら住所を書いた。君へは、帰って来たから広島へ来る折があれば是非寄るようにと、一筆書き添えた。君のこと故、返事など期待していなかったが、もしかすると電話でもかけてくるかも知れないとは思っていた。10月1日、僕の留守中に朝日新聞下関支局から電話があったという。しかし相手は君ではなかった。君の同僚のAという人から君の計を伝えるものであったとの事である。信じられなかった。A氏は翌日の夜もう一度僕に直接電話下さると言われて電話を初られたそうである。翌2日、関本先生から偶然電話がかかってきたが、僕は高鳴る胸を抑えながら、君のことには全然ふれなかった。その夜かってくるべきA氏からの電話で、前夜の電話の内容が誤りであったとの訂正が伝えられる事を、いかばかりでも期待していたからである。その夜9時半、電話は鳴った。—誤報ではなかった。ガス中毒による事故死というではないか。何ということをしてくれたんだ。

君と僕とは広大に入学してから知り合った仲だが、君は入学以来常にこの社会の矛盾に目を向けていた。特にこの日本の社会に、雇われられた人々、生きていく為に朝から晩まで文字通り身を粉にして働き、死ぬまで最低の生活を余儀なくされている人々の多くいる事に憤り、それを強いていく体制とその権力に激しく反撥していた。君の頭からは、いつもその事が離れていなかった。とは

言っても、君は頭だけで考え、左翼的議論をする事によってのみ満足するような男ではなかった。君は君の考を具体的行動に表わさずにはおれなかった。広島大学の部落問題研究会の人達と一緒に部落解放の為に青春のエネルギーを注いだのがそれである。

卒業後は、希望通り新聞記者になった。しかし朝日新聞という大企業の中で、「おまえはダイブ片寄っている。タタキ直してやる」と支局長に言われながら、ますます具体的にこの社会の矛盾に直面していた事と思う。僕がフランスへ行ってからは、あまり手紙も書かなかったが、いつか L・Humanite (フランス共産党機関紙)、Combat, Le Monde, Figaro など数種の新聞を買い揃えて送ってやった事がある。返事はもらっていないが、相変らずの調子で、バンバン書いてジャカスカ (こんな言葉づかいが君は好きだった) やっていたものと思っていた。久しぶりに帰って来たので、そのうち会って積もる話を聞かせてもらいたいと思っていたのに、君はもうこの世にはいないのか。君には、我が言語学教室の先輩 K 氏のいつも言われるように、「人間が人間として尊重される世の中を築く」ために、もっともっと仕事をしてもらいたかったのに

昭和 45 年 10 月

空

無 名 氏

五年ばかりも前になる

言語のハイクは水分峠に遊んだ

あなたは

フランスに行った親友と言ってくれた

俺れの目がぎらついていると

ただものではないと

遠い前から

涙が血ばしかった

かろうじて